

2016年 ベストリーダー 【一般図書】



第1位 『火 花』

又吉 直樹/著 文藝春秋 (F マ)

第2位 『人魚の眠る家』

東野 圭吾/著 幻冬舎 (F ヒ)

第3位 『ラプラスの魔女』

東野 圭吾/著 KADOKAWA (F ヒ)

第4位 『下町ロケット 2』

池井戸 潤/著 小学館 (F イ 2)

第5位 『羊と鋼の森』

宮下 奈都/著 文藝春秋 (F ミ)

第6位 『虚ろな十字架』

東野 圭吾/著 光文社 (F ヒ)

第7位 『サラバ! (上)』

西 加奈子/著 小学館 (F ニ 1)

第8位 『フランス人は10着しか服を持たない(1)』

ジェニファー L. スコット/著
大和書房 (590 フ)

第9位 『祈りの幕が下りる時』

東野 圭吾/著 講談社 (F ヒ)

第10位 『ユートピア』

湊 かなえ/著 集英社 (F ミ)

休館日

7月の休館日

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

8月の休館日

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

■ は本館の休館日です

※7・8月は月末休館日はありません

7月のギャラリー 『図書館を使った調べる学習 コンクール入賞作品展』

期 間：7月1日(土)～30日(日)
※ギャラリーの展示は17時までです

編集後記

自転車に関する本を読んでいると、数年前、一人で瀬戸内海のくしまなみ海道を自転車で行ったことを思い出します。また、遠くへ行きたいなあ、という気持ちが湧いてきました。ただ、夏場のサイクリングは熱中症に要注意です。暑いときは無理をせず、早朝に走るか、今回紹介した自転車小説などを読んで、走った気分になっていただけたらと思います。(か)

けやきどおり通信 (No.286)

編集・発行 碧南市民図書館

〒447-0057
碧南市鶴見町1-70-1
Tel: (0566) 41-0894



けやきどおり通信



2017年7月 ～NO. 286～



7月は、世界三大自転車レースの一つ「ツール・ド・フランス」が開催されます。フランスを中心に、山岳地帯を含めた総距離約3500kmのコースを自転車で駆け抜けるという過酷なレースです。ヨーロッパでは、オリンピックやサッカーのW杯と同じくらい人気があります。近頃では、日本人選手の活躍もあり、日本でも注目されるようになりました。優勝を目指して、熾烈な戦いを繰り広げる選手たちに、景色を楽しむ余裕は無いかもしれませんが、その土地独特の風やにおいを感じながら自転車で走ったら、きっと楽しいでしょうね。

これから旅行の計画を立てる方も多いかと思いますが、身近な乗り物《自転車》で、目的地までの道のりを楽しむという旅はいかがでしょう。今までの旅とは違って、自転車だからこそ見えてくるものもきっとあるはずです。

ということで、今月は、みなさんにもっと自転車に興味を持ってもらえるよう、自転車の旅行記をはじめ、自転車に関する本をご紹介します。



自転車旅

『ママチャリお遍路1200KM サラリーマン転覆隊』
本田 亮/著 小学館 (186マ)

遊び心を持った、超多忙な中年サラリーマンたちで結成したカヌーチーム「サラリーマン転覆隊」が、陸にあがって四国お遍路をママチャリで走り切る！ママチャリを押して登山道を進んだり、自転車置き場で野宿したり、吹雪の中峠を越えたりと、幾度となく力尽き、路上に倒れこみながらも走破した、汗と笑いの筋肉痛ドキュメンタリー。



『地図を破って行ってやれ！自転車で、食って笑って、涙する旅』
石田 ゆうすけ/著 幻冬舎 (291千)

自転車で世界一周をしたこともある著者が、自由気ままに日本各地を巡る。地元の人との交流、雄大な自然の風景、恍惚のグルメなど、感動がもりだくさん。やっぱり自転車旅はおもしろい！と思わせる一冊。

『自転車で見た三陸大津波 防潮堤をたどる旅』武内 孝夫/著 平凡社 (291.2ジ)

東日本大震災で大津波の被害を受けた三陸海岸。著者は、震災から数年が経過した、青森県から宮城県まで続く約400kmの沿岸を自転車で取材。自転車だからこそ見て、感じることできた、被災地の消滅と再生へと進む姿を伝える。

『疋田智のロードバイクで歴史旅』
疋田 智/著 柊出版社 (291ヒ)

平安京に出没した「鬼」とは何か、伊勢神宮と伊賀・忍者の関係など、ロードバイクの機動性とスピードで日本のさまざまな遺跡を巡り、漕ぎながら考え、発見したことがまとめられている。爽快なロードバイクと日本史の面白さが交じり合う「ロードバイク歴史旅」のすすめ。

『韓国「反日街道」をゆく 自転車紀行 1500キロ』前川 仁之/著 小学館 (292.1カ)

「自転車で一周してみて、やっぱり韓国が嫌いになるなら、それはそれで結構だ」という思いで旅に出た。「抗日」史跡をめぐり、現地の人々と詩や歴史について語り合う中で見えてきたものとは…。

『スマイル！笑顔と出会った自転車地球一周 157カ国、155,502km』
小口 良平/著 河出書房新社 (290.9ス)



自転車レース

『ツール・ド・フランス』山口 和幸/著 講談社 (786.5ツ) 新書
20年以上現地で取材している著者が、百年を超えるレースの歴史と選手たちが繰り広げた数々の激闘、日本人選手の活躍などを紹介し、「ツール・ド・フランス」の魅力を語る。



『敗者たちのツール・ド・フランス ランタン・ルーージュ』

マックス・レオナルド/著 安達 眞弓/訳 辰巳出版 (786.5ハ) 暮らしの本

「ランタン・ルーージュ」とは、ツール・ド・フランスを最下位で完走した選手に授与される称号である。長く、過酷なレースの中、勝てないことがわかっていながらも、苦しみから逃げずにゴールを目指し、走り続けた選手たちの物語。

『イラストでわかる！ロードレースの秘密』栗村 修/監修 がめんだ/イラスト
柊出版社 (786.5イ)

自転車レースの種類や、観戦のツボなどをイラストでわかりやすく解説。

自転車小説

////////////////////

『スマイリング！岩熊自転車 関口俊太』土橋 章宏/著 中央公論新社 (Fド)

函館市内の中学校に通う関口俊太は、地元で開催された自転車レースを見て、ロードバイクに憧れていた。しかし、両親からの愛情とお金に恵まれない俊太は、シティサイクルで練習していた。ある日、練習中に壊れた自転車を修理に出そうと俊太が向かったのは、町の自転車屋「岩熊自転車」だった。自転車屋の店長との出会いが「いいことなんて何もない」と後ろ向きになっていた俊太を変えることに――。

『サクリファイス』近藤 史恵/著 新潮社 (Fコ)

「ただ、あの人を勝たせるために走る。それが、僕のすべてだー。」主人公の白石誓は、自転車ロードレースのプロチームに所属し、レースの中では<エース>を勝たせるために全てを捧げる<アシスト>という役割だ。チームで各地を転戦するなか、白石は初の海外遠征で、ある悲劇に遭遇する。レースにかける青春とサスペンスが融合した自転車小説の傑作。

『追い風ライダー』米津 一成/著 スターダイバー (Fヨ)

交通事故で夫を亡くした妻、キャットシッターのバイトをするOL、少しくたびれたサラリーマン、サイクリングコース作りに取り組む男、沖縄出身のおミズの女の子。悲しみや迷い、後悔、叶えたい夢など、さまざまな思いを抱えた人々が、自転車を通じてゆるやかにつながる、勇気と再生のストーリー。ペダルを漕げば、自転車も人生も前へ進んでいく。

『あねチャリ』川西 蘭/著 小学館 (Fカ)

ケガで部活をやめた早坂凜は、学校に行かずに引き篋もっていた。重くなった体を変えようとサイクリングを始めた凜は、「自転車で駆けっこをする楽しさ」に目覚めていく。元“怪物競輪選手”やライバルたちと出会い、競い合い、挫折しながらも走り続け、ついに、世界選手権女子ケイリン決勝のトラックに立った。凜は世界チャンピオンになれるのか…。

『ヒルクライマー』高千穂 遙/著 小学館 (Fタ)

重力に逆らい、死ぬほど苦しくてもペダルを漕ぐことをやめず、「自転車で山を登る」という過酷な道を選ぶ人々。長い坂を上りきった先に何があるのか。登ることの面白さに取り憑かれた「坂バカ」たちの世界を、同じく「坂バカ」の著者が描く、ヒルクライムレース小説。

【その他】
////////////////////

『自転車はここを走る！自転車で安全に走るためのガイドブック』疋田 智/著 柊出版社 (681ジ)

車道の左側を走行するのが原則とされている自転車が、安全に走行するために知っておかなければならないルール、注意するポイントなどを、写真やイラストでわかりやすく解説。

『ロードバイクQ&A 今さらきけない/ボクな疑問』高千穂 遙/著 小学館 (536ロ)

ロードバイクに乗ってみたい人、最近乗り始めた人に最適なロードバイク入門書。超運動音痴でもロードバイクに乗れるのか、自転車に乗れば痩せるのか、などさまざまな疑問に答える。

『完全女子版！自転車メンテナンスブック』山田 麻千子、中里 景一/監修 東京テコ (536カ)